

# まちの情景と建築

田中 修一

日本編

住宅2

千二百年の古都 京の町屋



桓武天皇が仏教の政治介入を避けるために、平城京を引き払って長岡京に遷都した。しかし地形的な欠陥から(天皇自身は実の弟早良親王の祟りだと恐れたのだが)10年でその地を引き払う。やってきたのが京である。しかし京の地形にも欠陥があって、都の造成を行った時に、都大路(朱雀大路)の西側は湿地帯で、大規模な盛土を施したために西側半分は50年と持たず、現在まで東半分が都として残ることになるのだが。

それはともかく、まさか1200年も長続きするとは考えなかつただろう。時代の激動が幾たびも都を襲うが、その都度順応してやり過ごした。京都人の心情に「あの人たちはよその人やさかいに」という言葉が今でも生きている。上に乗る支配者への手立

てを心得ているのだ。決して逆らわず、と言って服従するのでもなく、誇りを持ってへりくだる。だから我々京都生まれではない者が知り合いの家の前を通りすぎると、家のお内儀が「素通りはないでしょう。さあどうぞ食事でもしていっておくれやす」あまり断っても失礼かな、などと応じようものなら、「だから田舎者は困る」と蔑まれてしまう。よそ者には居辛くなるようにできている。

朝廷と藤原氏北家の大繁栄で京の雅は育まれてきた。平安時代は貴族が文化を独占していたが、鎌倉以降の武家の政治支配によって没落する。更に下って室町末期からは商人が経済圏を握るようになり、茶道、書道、音曲、衣装などが庶民にも広まるようになって、今に続く伝統文化が京都らしさを育む。町屋の風情は庶民が作り出してきたものだ。とにかく古いものを大事にする。社寺が多いのは都が古いからではなく保存意識が高いからだ。その間を縫ってつなぐように町屋が構成されている。広大な神や仏の領域と、細く入り組んだ路地の風情のコントラストが程よい。それでいて新しいものにも獐猛に挑戦する姿は、おっとりした京言葉とは裏腹で逞しさを知らされる。



琵琶湖から疏水を通した水力発電で、南禅寺界隈を大工業地帯にしようとか(発電量がうまくいかず計画が断念されてよかったのだが)、精密機械や計測技術では日本一を誇り(島津製作所・島津マネキン)、アンパンの木村屋総本店、クリームパンの中村屋は明治初年の発明だ。さらに



庶民の味は京風のあっさりではなく、ラーメンの超こってり系(コラーゲン)は信じられなかったりする。

◀ 四条裏路地



◀ 嵯峨野街路

嵯峨天皇の離宮が今の大覚寺で、ここから化野までを嵯峨野と呼ぶ高級住宅地